



Cancer News



Doctor Interview

血液がん・乳がん



Doctor Interview ドクターインタビュー



血液がん
高齢者にも
やさしい化学療法

内科部長 藤崎智明



乳がん
ひとり一人に最良の
乳がん医療を

乳腺外科部長 川口英俊

- What is...? ——— 便潜血検査について知ろう!!
分子標的薬ってなに...?
- in Profile ——— がん専門薬剤師
- Team information — がん相談窓口
- mrc Place ——— クロス・ステーション



Message from the Director

がん診療推進室長 ごあいさつ

日本におけるがん患者数は年々増加の傾向をたどっており、当院のがん登録データにおいてはここ5年間で30%以上の増加となっています。そんな中で私たちが願うのは、ひとりでも多くのがん患者さんを救うことです。

現在わが国には、全国どこに住んでいても「質の高いがん医療」を受けられることができるよう国によって指定された『がん診療連携拠点病院』が約400施設あります。がん診療連携拠点病院は『都道府県がん診療連携拠点病院』と『地域がん診療連携拠点病院』の2つに分かれており、当院は平成19年に『地域がん診療連携拠点病院』の指定を受けました。また、平成23年4月には、がん診療体制の充実・強化を図るために院長直轄の部門として『がん診療推進室』を設置しこれによって各部門のスタッフが恒常的に情報交換・連携することのできる組織体制が整いました。

がん診療推進室では、各診療科におけるがん診療を充実させるとともに、外来化学療法室における抗がん剤治療や緩和ケアチームによる活動の充実を図っています。

また、がん患者さんとそのご家族に対する相談・支援を行う『がん相談窓口』では、年間延べ1,300件を超える相談に対応しており、単なる情報提供にとどまらず、患者さんとそのご家族の悩み解決のための支援を行っています。

そのほか、院内専門領域の教育および人材育成のための各種勉強会・研修会の企画運営を行っており、がん医療に携わる専門・認定資格者の育成支援も積極的に行っています。今後もひとりでも多くのがん患者さんへ質の高い切れ目のないがん医療を提供するため地域医療機関・福祉施設との連携を図りながら“温もりのある”がん医療の提供に取り組んでまいります。

がん診療推進室長 (副院長)
西崎 隆



松山赤十字病院 『ピンクリボン運動』

ピンクリボン運動とは、乳がんの早期発見や早期診断・治療の大切さを啓発する活動です。欧米諸国では乳がんで死亡する人は減少にありますが、日本では毎年増加の傾向をたどっており、この原因として日本での乳がん検診率の低さがあります。2004年には乳がんと診断された患者数は5万人を超え、一生の間に乳がんになる確率は“16人に1人”とされています。

松山赤十字病院では2013年3月、親しみやすいキャラクターを通じたピンクリボン運動を考え、“ゆるキャラグランプリ2012”で1位となった『いまぱりゆるきゃらパリィさん』とのコラボレーションによるピンクリボンバッジを製作しました。このバッジは当院限定で1年間販売し利益の全額を乳がん患者支援団体へ寄付します。(2014年3月末まで販売予定)



肝臓・胆のう・膵臓内科 横田部長ラジオ出演風景
＜出演番組＞
南海放送ラジオ「ういず」内
毎週金曜16:00～『がんと向き合うラジオ』

がんに関する情報を発信!!

『がん』と聞くとネガティブなイメージを持つ人もいますが国民の2人に1人が罹患すると言われる今、がんに対する正しい知識を身に着けることが重要です。

当院では今年、がんに関する情報の普及・啓発活動の一環として、治療に取り組む最前線の医師・看護師たちがラジオに出演し、がんの早期発見や治療法、緩和ケアがん患者に対する支援などについてお話ししました。

さまざまなメディアを通して、ひとりでも多くの方にがんをより身近なものとして捉えていただき、がん検診の重要性を感じていただけるよう今後も努めていきたいと思っています。



“高齢者にも やさしい化学療法”

第一内科部長 藤崎 智明

† 血液がんとは

血 液の成分の主に白血球ががんになったものが血液がんです。骨の中の骨髓にある造血幹細胞が分化していろいろな種類の血液細胞ができますが、どの段階の細胞ががんになったかによって、血液がんの種類が分かります。代表的なものとして、白血病、多発性骨髄腫、悪性リンパ腫が挙げられます。血液の細胞は体中を巡るため、普通のがんのように転移という概念は無く、発症した時点で体中に広がっていることが少なくありません。悪性リンパ腫の半数はリンパ節の腫れで発病しますが、がん化したリンパ球は全身を巡るため全身のあらゆる臓器にも病変を作ります。

白血病では、正常な血液が減ることによる症状が表れます。外敵から体を守る白血球の減少による発熱、酸素を運ぶ赤血球の減少による動悸・息切れ・めまい、血小板の

減少によって血が止まらなくなるなどが主な症状です。多発性骨髄腫では骨を溶かしていく症状が出ることも多いので、腰痛・背部痛などが起こりやすく、悪性リンパ腫では、リンパ節の腫れ、発熱、多量の寝汗・体重減少などが代表的な症状です。このような症状が現れたら、早めに病院で診察してもらうことが大切です。健康診断も発見のきっかけになるので、必ず受診してください。

† 高齢者にも完治を目指した治療が可能です

近年、治療の毒性を低める様々な工夫によって、血液がんでは90歳を超えても治療させていただくことが多くなりました。がん細胞の特定の分子のみを標的とする分子標的薬によって、選択的にがんの増殖を抑え、副作用の少ない治療が行えるようになりました。中でも慢性骨髄性白血病は

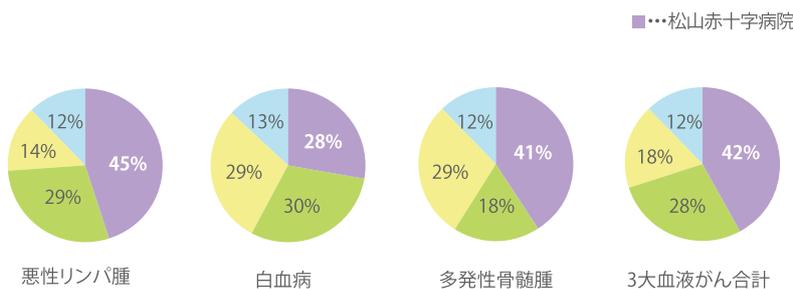
従来は骨髓移植をしなければ治らないとされていましたが、今では内服薬で治るようになってきました。放射線治療においても放射線照射の技術的な向上や、放射免疫療法が治療効果を高めています。また抗がん剤を減らして行う「ミニ移植」の効果が確認され、ご高齢の場合でも安全性が向上しています。

すべての治療において、患者さんの年齢や体力に応じて薬の種類と量を調整しています。治療が長期間の場合も多いため患者さんと相談しながら、社会的背景や個人的な事情も考慮して治療計画を立てます。毎週開かれるカンサーボードでは7名の血液専門の医師だけでなく看護師、薬剤師、検査技師がいつも「自分が患者さんならどうして欲しいか？」という視点でそれぞれの患者さんに応じた最適な治療方針を検討しています。

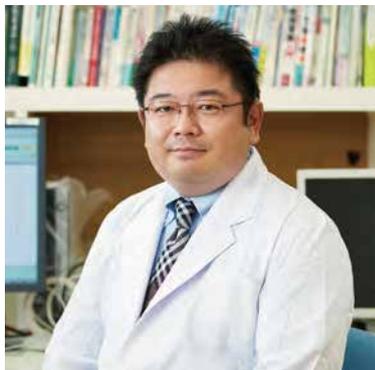
当院の血液がんにおける入院実績は県内1位で、これは松山2次医療圏の血液がん患者さんの4割に相当します。同じ病気で治療に臨んでいる多くの患者さん同士が気軽に情報交換できる環境にあります。また困ったときは主治医・担当看護師だけではなく、それ以外のスタッフにも気軽に相談できる体制をとり、患者さんが安心して治療に専念できるよう心掛けています。

血液がんはきちんと治療を受けていただければ、完治が望める病気です。患者さんご自身が病気の性質と治療の必要性を十分理解したうえで治療法を選択し、患者さんと医療者が協力して病気に打ち勝つことを目標にしています。

松山2次医療圏のがん診療拠点病院の入院実績
(2011年4月～2012年3月の入院患者割合)



※ 全国DPCデータ2011より



“ひとり一人に 最良の乳がん医療を”

乳腺外科部長 川口 英俊

＋ 標準治療を基盤に

乳

がんは日本人女性が罹るがんの第1位です。その発症率は近年急激に増加しており、最新データによると、日本人女性が一生のうちに乳がんを発症する割合は16人に1人と言われています。2010年以降は、年間約5万人が乳がんにかかり、1万2千人以上が亡くなっています。これは過去40年間で5倍に増加した事になります(図)。その主な要因として食生活の欧米化、独身の増加や出産の高齢化により、乳腺が女性ホルモン・エストロゲンの影響を長く受けるようになったことなどが挙げられています。

乳がんは多様にあるタイプに応じて外科手術、放射線療法、薬物(ホルモン療法薬・分子標的薬・抗がん薬)療法が選択されます。当院では、その組み合わせや順番など術後補助療法の治療方針はすべて乳腺外科医病理医、薬剤師、乳がん専門

看護師、臨床検査技師、放射線科医師など20数名が参加する週1回の乳腺カンサーボードで決定されます。それぞれの専門的な知見や看護師が知りえた情報を反映させるためです。標準治療とは、臨床試験の結果を基に検討され、現時点で最善と専門家間で合意された治療法を意味します。私たちは、標準治療が提供できるよう、最新の知識の習得と技術向上を心がけています。

＋ 「最良の治療と支援とは何か」を チームで問い続けます

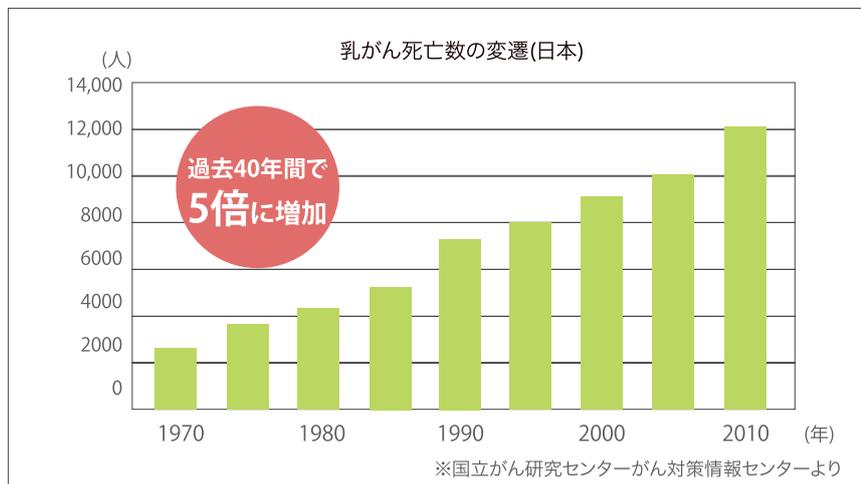
しかし、標準治療がその患者さんに最もふさわしいとは必ずしもいえず、その患者さんが何をしたいか、何を大切にしているのか、すなわち、「その人にとって最良の治療と支援は何か」を常に自問しています。

例えば、日本人の乳がん患者が最も多い40代後半の女性は、働き盛りで子育て中

という人も少なくありません。生活の質をなるべく維持するために、仕事を継続するためのアドバイスや、必要に応じて職場への説明も行うなど、就労の支援にも力を入れています。また、乳がんになったことを母親が子どもに話せない場合もあるため子どもへの告知方法の相談にのるなど家族も視野に入れたサポートに取り組んでいます。

さらに当院では、乳がん看護認定看護師が、がんの告知や、再発の告知などの悪い情報を医師が患者さんに伝える時には必ず同席し、患者さんの気持ちと置かれている状況を受け止め、その後の不安を取り除いていくための重要な役割を果たしています。

最後に、当院の新たな取り組みとして近隣の乳腺専門クリニックで乳がんと診断された患者さんを、クリニックの医師が当院の医師と協力して手術を行い、術後の補助療法および経過観察もクリニックの医師が行うケースが実現しました。ひとり一人が最良の乳がん医療を受けられる環境を整えるために、今後も地域の医療機関との連携を積極的に推進していきたいと考えています。



Team Information

がん相談窓口

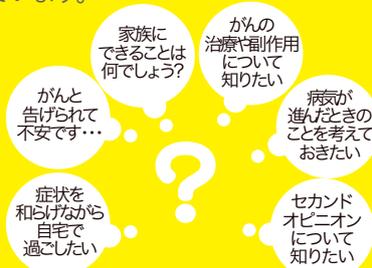
様々な悩みを抱えつつも「誰に相談したらよいか分からない」といったがん患者さんやご家族は少なくありません。

『がん相談窓口』とは、そういった不安や心配事について相談できる、いわばがん患者さんとそのご家族にとっての『駆け込み寺』的な存在です。当院のがん相談窓口では、がん相談員としての研修を受けた看護師、医療ソーシャルワーカー、臨床心理士などが問題解決のお手伝いをしています。

<松山赤十字病院がん相談窓口>

TEL:089-926-9516

受付:平日9:00~16:00



In Profile

がん専門薬剤師 (一般社団法人日本医療薬学会認定がん専門薬剤師)

がん医療の進歩に伴う新しい薬剤の開発等により、抗がん剤治療は高度化・複雑化しています。こうした状況のなかで、患者さんの安全性を確保し、最適な薬物療法を提案するため『がん専門薬剤師』の必要性が求められるようになりました。

『がん専門薬剤師』の役割・・・

- ・抗がん剤の特徴を理解した上で安全な薬剤の取扱いや調製
- ・薬剤の不適切な投与を回避するためのチェック
- ・適切な薬物療法を選択するために薬学的見地に立った情報提供
- ・副作用対策を標準化し、患者さんのQOL(生活の質)の維持・向上に貢献

がん医療においては、高度な専門知識を持った各職種の特任者によるチーム医療が行われます。そのなかで対等にコミュニケーションをとるためには、様々ながん種の標準治療を理解し、副作用に関する専門知識、文献を解釈するための統計学的な知識など、がん全般にわたって学んでいなければいけません。また、そういった知識の習得とともに、抗がん剤の調製業務、服薬指導などの実務経験を通して得る「患者さんを知る経験」が非常に重要だと私自身考えています。

今後も、患者さんが安全に、安心して治療が受けられるように、目を光らせていきたいと思っております。



mrc Place

クロス・ステーション

松山赤十字病院では、毎月第4月曜日にがん患者サロン『クロス・ステーション』を開催しています。

がんサロンとは、がん患者さんとそのご家族が病気や治療に伴う不安や苦痛、生活上の悩みや心配など、お茶を飲みながら分かち合い情報交換を行う場で、現在では全国各地に広がりつつあります。日本赤十字社ロゴのレッドクロスと人々が交わるという意味の“クロス”、人々が行き交いホッとする場所という意味の“ステーション”から名付けられたクロス・ステーションは、『語り合いの会』とさまざまなテーマに沿った『ミニレクチャー』に分かれており、当院受診の有無に関わらず誰でも気軽に立ち寄ることができます。これまで参加された方々からは、「同じ病気の人と色々話せて良かった」「苦労しているのは自分だけじゃないと分かり頑張る気持ちがわいた」といった感想を頂いています。

お茶を飲みながら同じ境遇の人たちと交流することで少しでも過ごしやすい気持ちで普段の生活に戻っていただける、そんなサロンを目指しています。



便潜血検査について知ろう!!

健康診断でもおなじみの便潜血検査は、何のためかご存知ですか?実は、大腸がんの約6割はこの検査で発見できるといわれています。大腸にがんやポリープがあると、便が通過するときにこすれて血液が付着するため、便潜血が病変発見のカギになるのです。

ただし、正確な結果を得るには、正しい方法で採便する必要があります。血液は便の表面に部分的に付着するため、採便棒で便の表面をまんべんなくこすり取ります。キットのガイドに従い、適正な量を採取しましょう。

また、1日1回、2日間の採取が基本となっているのは、病変部分が毎日出血するとは限らないことから、より精度を上げるためなので、必ず2日間採便しましょう。

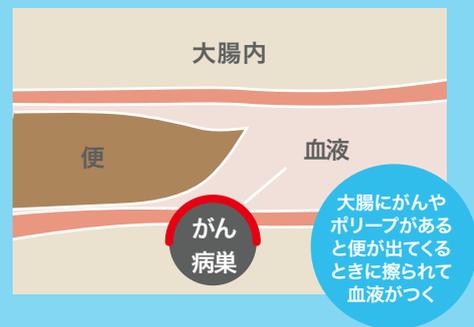
潜血がある(陽性)との結果が出た場合は、必ず精密検査を受けましょう。よく痔の場合に、それによる陽性反応と自分で判断して受診しないケースがありますが、がん発見の貴重な機会を逃すことになるかもしれません。受診して医師に相談することが大切です。

便潜血検査

- ✓ 便の表面を数か所削り取る
- ✓ 1日1回、2日間行う

※ 便のどこに血液がついているかわからないので、数か所から採ることがポイントです。

大腸がんは40~50歳代から増え始めます!
50歳以上の方は、便潜血検査を年に1回は受けましょう!



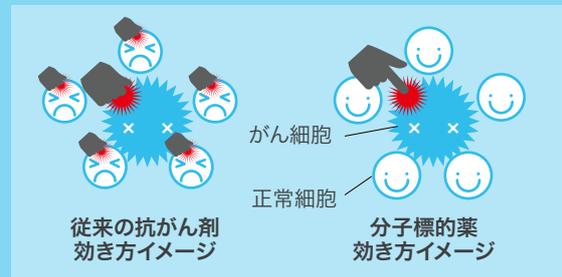
分子標的薬ってなに・・・?

分子標的薬とは、がん細胞が持っている増殖や転移などに関係する特定の分子を狙い撃ちして、その働きをおさえることによって治療を行う薬です。近年では、この分子標的薬を使った治療が増加しており、血液がん、肺がん、大腸がん乳がん等で治療に応用されています。

分子標的薬は特定の分子を狙い撃ちするため、その高い抗がん効果が期待されます。がんの種類により、従来の抗がん剤よりも目覚ましい効果が得られるものや副作用の少ないものもあり、分子標的薬の登場はがん治療に大きな進化をもたらしました。しかし、残念ながらすべてのがん患者さんに劇的な効果をもたらさず、かつ副作用がゼロという夢の薬ではありません。効果に限界があれば、副作用もあります。薬の種類により、蛋白尿、高血圧、甲状腺機能低下、心機能低下、特殊な皮膚炎等の副作用があるため治療にあたっては、そうした副作用に迅速に対応できる

抗がん剤治療に詳しい専門家や、チーム医療によるサポートが重要となります。

近年の研究では、どのような人に分子標的薬が効くかが解明されてきており、新たな標的分子の探索とそれらに対する新薬の研究・開発が世界的に進められています。切除不能な難治がんを含め、今後こうした研究・開発がより多くのがん患者さんに適合する治療へと結びつくことが期待されます。



<http://www.matsuyama.jrc.or.jp/cancer/>



松山赤十字病院 がん診療推進室

〒790-8524 愛媛県松山市文京町1番地
TEL: 089-903-0963 FAX: 089-926-9614

